

小櫃川流域における中世遺跡の変遷

笹生 衛・柴田龍司

1. 中世前期の様相

小櫃川流域では、ここで紹介した芝野遺跡、荒久遺跡以外に、12世紀から15世紀までを中心年代とする遺跡には、木更津市菅生遺跡、袖ヶ浦市文脇遺跡、同市三箇遺跡、同市広町遺跡の4遺跡が発掘調査されている。なかでも、菅生遺跡と文脇遺跡では、中世前期の遺構・遺物がまとまった形で発見されているところから、先に紹介した2遺跡に、この2遺跡を加え、これら4遺跡をもとに小櫃川流域の中世前期遺跡の類型化を試みたい。そこで、まず、菅生遺跡と文脇遺跡について簡単に紹介しておこう。

菅生遺跡 菅生遺跡は、芝野遺跡の1kmほど下流、小櫃川南岸の自然堤防と後背湿地に立地する遺跡で、『吾妻鏡』に登場する、前摂政家(近衛家)領・菅生庄の荘域に含まれると推定される。國學院大学により1938年、1941年、1948年、1972年、1973年の各年に、自然堤防上の発掘調査が(註1)、また千葉県文化財センターにより1992年、1993年に後背湿地部分の水田遺構の発掘調査が実施されている(註2)。

中世の遺構としては、1973年の調査で検出された大形溝2条があり、この溝は屋敷もしくは居館を区画する機能をもっていた可能性も考えられている。遺跡の年代については、報告書では15・16世紀とされているが、報告書で図示されている以外の遺物も含めて遺物の様相を概観すると、報告書に示された年代観よりも先行した年代を考えざるをえない。

まず、瀬戸窯製品では、瀬戸窯編年(藤沢編年)(註3)中期様式I期に属する縁折深皿1点、中期様式II期に属する底卸目皿1点が確認でき、平碗と卸皿も中期様式末期から後期様式にかけてのものと考えられる。また、瓦質の火鉢は、鎌倉では14世紀代の遺物との共伴例が知られている(註4)。さらに、常滑窯の甕についても常滑窯編年(赤羽編年)(註5)V期前半に属するものであり、他

遺跡での共伴例から15世紀代までの年代が考えられる。つまり、菅生遺跡出土の中世遺物は、14世紀代に中心があり、15世紀は最終末の段階であると考えられる。そして、これと符合するように、1992年に実施された菅生遺跡西側低地部分の水田遺構の発掘調査では、12世紀代に遡る横田・森田分類(註6)の白磁碗IV-1類や同安窯系青磁碗I-1類、13・14世紀代に多くみられる竜泉窯系青磁碗I-2類、I-5類、さらには瀬戸中期様式の製品など、12世紀から14世紀ごろまでの多量の遺物群が発見されている。このことは、菅生遺跡周辺に、中世初期から前半にかけての、豊富な遺物を伴う遺構の存在を予想させるものである。

1973年の発掘調査における、屋敷地の区画溝とも思われる大形溝の検出と、1992年の発掘調査における、白磁碗IV類をはじめとした、古い段階の貿易陶磁器の多数出土が、菅生遺跡では特筆される。この二点を考え合わせると、菅生遺跡の周辺部分には、在地領主か上層名主の屋敷地の存在をすることも可能であろう。

文脇遺跡 文脇遺跡は、荒久遺跡の北方約2kmほどの地点に所在する遺跡で、畔蒜庄内に位置すると思われる。発掘調査は、君津郡市文化財センターにより、1989年に実施されている。

検出された中世遺構は、掘立柱建物2棟、道路跡2条、竪穴状遺構4基、土坑墓2基である。掘立柱建物は、比較的大形のものが1棟存在し、土坑墓には和鏡と漆塗りの鏡箱が伴う(註7)。

出土遺物には、竜泉窯系青磁碗I-1類5点、同I-2類2点、同I-5類9点、同青磁杯I類1点といった多数の貿易陶磁器をはじめとして、渥美・常滑窯の甕、常滑窯II期後半のコネ鉢、在地産土師質土器小皿・杯、伊勢系土鍋など多数の遺物が出土しており、その年代も13世紀代から14世紀前半を中心としている。ただし、瀬戸窯が量産体制に移行する中期様式後半から後期様式段階

の製品がまったく含まれていないことから、14世紀中ごろ以降、文脇遺跡の中世集落は、急速に衰退・消滅に向かったと推定される。

芝野遺跡と類似した年代傾向や掘立柱建物を中心とした遺構構成をとるものの、貿易陶磁器を中心とした豊富な遺物が出土していることが、文脇遺跡の特徴ともいえる。遺構の密度は、芝野遺跡に比べて、はるかに散漫であるが、掘立柱建物の一棟は、庇もしくは縁が付く大形建物であり、貿易陶磁器を中心とした豊富な遺物量を考え合わせると、その居住者は、芝野遺跡よりも上層の農民、具体的には中・小名主層を想定でき、遺跡の性格としては、中・小名主層の屋敷地の一部とも考えられよう。

遺跡の年代の変遷 次に、以上2遺跡に、荒久、芝野の2遺跡を加えた4遺跡の年代的な変遷状況をみてみよう。

まず、12世紀中ごろから後半にかけて、芝野、菅生、文脇の3遺跡があい前後して、次々に成立したと考えられる。そして、芝野、文脇遺跡では遺物の中心年代が、13世紀代から14世紀前半までにあり、この時期の活発な活動が想定できる。また、菅生遺跡についても、周辺部分の発掘調査で出土した遺物から同様な状態を推定することができる。

ところが、14世紀中ごろから後半にかけて、まず文脇遺跡が消滅し、芝野遺跡についても、瀬戸後期様式の製品がまったく出土していないことから、一時的な断絶も考えられ、衰退傾向にあったとも推定できる。

これとは対照的に、荒久遺跡が、15世紀前半までには成立し、最盛期をむかえている。そして、15世紀後半には、芝野、菅生、荒久の3遺跡が一斉に廃絶していったと考えられる。

結局、小櫃川流域の中世前期の遺跡には、12世紀中ごろ～後半、14世紀後半、15世紀後半の三つの大きな画期をみることができるのである。

遺跡の性格 以上、小櫃川流域における中世前半の遺跡について概観してきた。その結果、遺跡の性格としては、

- ①菅生遺跡→在地領主・上級名主層の屋敷地
- ②文脇遺跡→中・小名主の屋敷地の一部
- ③芝野遺跡→小百姓・作人層の在家
- ④荒久遺跡→延命寺門前の宿

という推定を行ってみた。これは、各遺跡の年代的な消長傾向、検出遺構・出土遺物にみられる階層性、更に遺跡の立地をもとに推定したものであるが、各遺跡とも部分的な発掘であるとともに、遺構・遺物の厳密な分析は行われていない。そのため、ここに示した、その性格も可能性を示すにとどめたい。

また、東京湾岸の小櫃川流域と小糸川流域には、14世紀から15世紀前半にかけて、北条・金沢氏の菩提寺であった称名寺の寺領が点在し、これらの寺領に関連した当時の文書が、金沢文庫や覚園寺に残されている。これらの文書には、「金田保(木更津市金田周辺)内高柳村炭錢注文」、「畔蒜荘横田郷(袖ヶ浦市横田周辺)検田帳案」「上総国周東郡内(君津市子安周辺)称名寺領年貢請文案」など、当時の村構造や耕地の状況を具体的に伝える史料が含まれており(註8)、これらの史料の分析結果と、先の各遺跡の分析結果を比較することにより、さらに詳細で正確な遺跡の性格付けが可能になるものと思われる。

画期の背景 次に、4遺跡における年代的な画期であるが、そこには、

- ①12世紀中ごろ～後半
→菅生、文脇、芝野遺跡の成立
- ②14世紀後半～15世紀前半
→文脇遺跡の消滅と荒久遺跡の成立・発展
- ③15世紀後半
→菅生、芝野、荒久遺跡の消滅

という、三段階の画期を確認することができた。この画期は、西日本を中心とした中世集落遺跡でも確認されており(註9)、それと同様な画期が、東国・上総地方の中世遺跡においても指摘できるといえよう。

また、その背景については、すでにいくつかの可能性が考えられているが、西上総周辺に関する文献史料と関連させると、以下のようなことが考えられる。

まず、①の画期の背景としては、低地における耕地の再開発が推定されているが、ここ小櫃川流域では、『吾妻鏡』に散見する荘園との間に、少なからぬ関係が想定できよう(註10)。『吾妻鏡』元暦2年(1185)6月5日条には飯富庄(芝野遺跡北側地域)が、文治2年(1186)6月11日条には熊野別當領・畔蒜庄(文脇遺跡周辺)が、文治4

年(1188)6月4日条には前摂政家領・菅生庄(菅生遺跡周辺)が、それぞれ確認でき、これらの荘園は、12世紀代に次々に成立したと考えられ、これら荘園の成立と菅生遺跡以下の三遺跡の成立は、密接に関係していた可能性を推定してもよいであろう。

②の画期の背景としては、荒久遺跡の部分でも述べたように、交通・流通路の整備・発展とそれに伴う村落構造の変化を考えることができる。西上総地域における、交通・流通手段の整備を示す史料としては、応安3年(1370)10月付「上総国周東郡波多沢村検見帳」を挙げることができる(註11)。ここでは、古戸津(富津市富津周辺)の「問丸」が初めて確認でき、14世紀後半には、西上総には、広域物資流通の中継を専業とする商人が存在できる環境となっていたと考えられる。そして、このことは、小河川交通ルートやそれにつながる内陸交通路の整備が進行していたことを示していると思われる(註12)。つまり、14世紀後半の交通・流通路の整備の結果、可能となった物資の多量な流通が、村落構造に変化をもたらすと同時に、荒久遺跡にみられるような「宿」を成立させていったのではないだろうか。

最後に、③の画期の背景としては、再三にわたって述べているように、真里谷武田氏の領国支配が大きく関係していると考えられる。

真里谷武田氏の祖・武田信長は、『鎌倉大草子』によれば、康正2年(1456)に上総国に入国し、領国支配を開始したとされるが(註13)、その支配は、それまでの荘園・国衙領を押領する形で進められたと考えられる。そして、これは、それまでの荘園内に存在していた村落や、荘園・国衙領と荘園領主・国衙を結ぶ形で展開していた交通・流通路には、移転や再編成といった大きな変化が起きたことは容易に推定できる。このような変化のなかで、菅生遺跡、芝野遺跡、荒久遺跡は、次々にその姿を消していったと考えられよう。

(笹生 衛)

註・参考文献

- (1) 乙益重隆他『上総菅生遺跡』 木更津市菅生遺跡調査団 1979
- (2) 1992年4月から1993年3月までの期間で、財団法人千葉県文化財センターにより、発掘調査

が実施されている。

- (3) 藤沢良祐「古瀬戸中期様式の成立過程」『東洋陶磁』第8号 1982
- (4) 服部実喜『千葉地東遺跡』 神奈川県立埋蔵文化財センター 1986
- (5) 赤羽一郎『常滑焼—中世窯の様式—』考古学ライブラリー23 ニューサイエンス社 1984
- (6) 横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」『九州歴史資料館研究論集』4 1978
- (7) 財団法人君津郡市文化財センター調査研究員・山本哲也氏のご教示による。
- (8) 千葉県史編纂委員会編『千葉県史料 中世篇 縣外文書』 千葉県 1966。
197号文書、181号文書、222号文書
また、これらの文献史料と考古資料を比較する場合、福島金治氏の一連の研究が参考になると思われる。
福島金治「上総国周東郡内の金沢称名寺領について」『日本歴史』494号 1989 など。
- (9) この画期については、西日本を中心に多くの研究があるが、中部地域以東では、以下の論文が発表されている。
佐藤公保「清洲周辺の中世村落」『清洲—織豊期の城と都市—』東海埋蔵文化財研究会 1989
柴田龍司「中世城館の画期—館と城から城館へ—」石井進・萩原三男編『中世の城と考古学』新人物往来社 1991
前川要「中世集落の動向と流通機構の再編—越中における中心集落網に関して—」同上
- (10) 新訂増補国史大系『吾妻鏡』第一
- (11) 註(8)に同じ。217号文書
- (12) 市村高男氏は、最近の論考のなかで、中世房総地方における、河川を含めた水運について論じられているが、これらの水運ルートを結ぶ内陸交通についても、今後、研究が進められる必要があると思われる。
市村高男「中世東国における房総の位置—地域構造論的視点からの概観—」『千葉史学』第21号 1992
- (13) 『鎌倉大草子』群書類従 第25輯

なお、15世紀中ごろの画期については、政治史的には、峰岸純夫氏の指摘する関東府体制の崩壊と大きく関連することは言うまでもないで

あろう。

峰岸純夫「東国における十五世紀後半の内乱の意義－「享徳の乱」を中心に－」『中世の東国－地域と権力－』 東京大学出版会 1989

2. 中世後期の様相

15世紀の画期

本誌で概要を紹介した芝野遺跡、荒久遺跡、笹子城跡を始め、小櫃川流域で発見された他の中世遺跡（菅生遺跡、文脇遺跡、真里谷城跡）は、遺跡の性格はさまざまではあるが、遺跡の存続時期をみると集落遺跡が14世紀後葉から15世紀中葉にかけて廃絶するが、逆に城郭は15世紀中葉以降から始まる傾向がとらえられる。

このような傾向は、最近全国的な傾向として認識されるようになってきている（註1）。すなわち、中世前期に成立した集落は15世紀を中心に廃絶し、16世紀には継続しないことと、16世紀を通じて機能する城郭は15世紀代から成立し、また15世紀中葉に城郭は臨時的な施設から恒常的な施設へ変化することが指摘されている。

小櫃川流域でも同様な傾向がとらえられたわけであるが、それでは、15世紀中葉以降の集落遺跡の実体はどうであろうか。実は特に千葉県内に限ったことではないが、該期の集落遺跡の検出例は極めて稀であり、その時期の遺跡は大部分城跡と墓地によって占められている。笹子城跡や真里谷城跡で15世紀中葉以降の遺構・遺物が数多く検出されたからといって、芝野遺跡や荒久遺跡のような集落遺跡と機能面で同列に扱うことはできないことから、現段階での考古学研究における15世紀中葉以降の集落の実体は不明といわざるをえない。

しかし、消去法的手法を使うならば類推することは可能である。千葉県内の事例でみるならば、いままで発掘調査といえば、「周知の遺跡」として認定されやすい台地や低丘陵上を対象とすることが多く、城跡や墓地などの中世遺跡も多く検出されてきた。それとともに近年は芝野遺跡や下ノ坊遺跡B地点（安房郡鋸南町）、市原条里制遺跡（市原市）（註2）のような沖積地に立地する遺跡の調査例も増加してきたが、ここでは台地上ではほとんど検出されていなかった中世前期の遺跡が多く検出されている。

一見県内ではいたる所で発掘調査が実施されて

いるようであるが、実は近世から続く農村集落の下は全くといっていいほど調査例はない。ほとんどの発掘調査が開発に伴って実施されるため、開発行為が現在の集落を避けて行なわれることが多い現状では、発掘調査もまた現在の集落の下で実施されることは少ない。

このような発掘が実施されやすい地点の特徴からみてみると、15世紀中葉以降の集落遺跡は発掘がほとんどおよんでいない場所、すなわち現在の農村集落が立地しているところに想定せざるを得ないであろう。

現在の農村集落は、台地あるいは低丘陵の裾部や自然堤防・砂堤列上に立地することが多い。特に中世城跡が占地する台地や低丘陵の裾部にはほとんど今でも近世から継続する集落を認めることができる。

15世紀以降の集落が、近世から続く農村集落と重なって立地しているならば、中世前期の集落の廃絶と恒常的に維持・管理される城郭の成立がほぼ同時期の現象であることを考慮するならば、15世紀以降の中世後期の集落は城郭と密接に結びついていたこととなる。

台地や低丘陵の裾部に立地する集落は背後の山にある城郭に、沖積地内の自然堤防や砂堤列上に立地する集落は城郭化した館に、それぞれ寄り集まるように集村化していった結果、形成されたものと思われる。

集村化の要因としては、荘園公領体制の崩壊とそれに替る国人領主層クラスの在地支配の強化に起因しているのではないだろうか。

小櫃川流域では、中世前期以来摂関家・得宗家領等から鎌倉円覚寺や金沢称名寺などの寺社の荘園へと変遷してきたが、いずれも時の中央権力によって擁護されてきた土地支配構造であったが、関東における鎌倉府体制の崩壊と、それに替って在地支配に乗り出した真里谷武田氏によって寺社領などの荘園は押領され、領域内の方々に領域支配の拠点として築かれた城郭を中心とした地区に集落は移動し、城館と一体となった集落形態を形成したと思われる。

16世紀の画期

15世紀中葉に、いままで臨時的な施設であった城郭が、恒常的に維持・管理される城郭へと変化した。最近の考古学の成果から百数十年間にお

よぶ戦国時代の間にさらに機能的に大きく変化することがとらえられようとしている。

千葉県内では、いままでに200例近い城館跡の発掘例があるが(註3)、そのなかで笹子城跡と真里谷城跡が遺物量の多さで際立っている。両城跡はともに真里谷武田氏に関連する城郭であったため、16世紀中葉には廃絶したものと考えられるので、16世紀中葉以降の遺物は基本的には出土していない。

しかし、従来の調査例の主体を占める16世紀後半代まで機能した城跡の出土遺物量と比較してみても量的な差は大きい。例えば文献史料や縄張りから確実に16世紀後半まで機能していた椎津城跡(市原市)・長南城跡(長生郡長南町)・山室城跡(山武郡松尾町)(註4)では、15世紀後半代からの遺物が出土しているが、16世紀後半代よりは16世紀前半代までの遺物の方が多く出土している。

このような傾向は、戦国期の前半と後半では特に陶磁器の生産地における生産量の変化、あるいは流通量の変化が反映しているとは考えにくいことから、城郭の機能や城内の機能が変化したためと考えた方がよいであろう。この点はすでに中井均氏によって西日本での発掘事例で指摘されていることである(註5)。

城郭機能の変化を笹子城跡でみると、笹子城は大きく①築城時の形態、②大改築後の形態、③廃城直前の形態と、三つの形態に区分できるが、②の時期には遺構・遺物がともに豊富で、特に平場6・7と平場8は日常生活空間として強く意識されていた。しかし、③の時期では堀が新たに掘り直され、切岸とよばれる壁面はより急傾斜となり、防御性が一段と強化されたが、反面日常生活空間としての機能は稀薄となる。

笹子城跡の場合は、防御性が強化されたが、まもなく破却を受け廃城(北半部について)となったが、長南城跡や山室城跡では大改築時の盛り土整地層内に16世紀中葉までの遺物は含まれるが、それ以後の遺物はほとんど検出されず戦国末期まで使用されるのである。

以上の県内における調査事例からみても、戦国期の城郭でも16世紀中葉あたりを境に、前半は城内に日常生活空間が普遍的に認められるのに対し、後半は大改築を受け防御性がさらに高められるが、逆に日常性は極めて弱くなり、より軍事性を重視

した施設へと変化するようである。

戦国期の城郭が前半と後半とでは機能的に大きく変化する要因としては、16世紀中葉までは各々の城郭が集落とは一体の関係にあり、城内も含めて「城郭集落」とよべるような性格のものであり、基本的には「村の城」(註6)であったといえよう。

しかし、16世紀中葉以降は、各々の城郭を拠点としていた在地領主層を統合するような広域領主権力が成長してくると、個々の城郭は広域領主権力によって取捨選択され、軍事的に重要性の高い城郭が選択され、それらは最新の築城術によってさらに改築され防御性を強化されていくが、逆に集落との一体性は稀薄となっていくのではないだろうか。

すでに萩原三雄氏が指摘したように(註7)、甲斐武田氏領では、武田氏権力によって軍事体制に組み込まれる城郭と、組み込まれない城郭に選別されるようであるが、考古学の成果からもそれを肯定することができるであろう。

このような変化を県内の事例でみると、究極的には本佐倉城跡(印旛郡酒々井町)や臼井城跡(佐倉市)で認められる城下集落を内包した「惣構」構造(註5)や長軸が1km以上ある巨大な規模を有する万喜城跡(夷隅郡夷隅町)に代表されるように、領域支配の拠点として機能が集約されて城域は拡大していったのである。

小櫃川流域では、16世紀後半は中・上流域は里見氏、下流域は後北条氏の勢力範囲であったと思われるが、里見氏によって本拠の城郭として久留里城(君津市)が整備拡充され、南半部の笹子城は両勢力のどちらかによって境目の城として築き直されたものと思われる。

15世紀を画期とした集落形態の変化と恒常的な城郭の成立、16世紀中葉を画期とした城郭機能の変化について述べてきたが、二つの画期には一見関連性はうかがえそうもないが、領主権力と領民(=城郭と集落)の関係でみてみれば連続性がとらえられるであろう。

戦国時代前期においては、真里谷武田氏のような国人領主層やその一族・家臣層などの在地領主層の在地支配の確立期にあたるが、各々の在地支配の強化をはかるため、笹子城のような集落と一体化した城郭を築いたが、この時期の城郭の基本的な機能は戦乱時における集落単位に近い領民の

避難所である「村の城」であった。

しかし、戦国時代後期になると広域な領主権力の成長に伴い、集落形態の変化の有無については不明であるが(註9)、城郭の取捨選択が行われ、一部の城郭については改築・拡充され広域な避難所としての機能も付与されるが、一方では改築もほとんどされず「村の城」として集落に残された城郭もまた多くあったであろう。

以上、小櫃川流域の中世遺跡を例に中世全般を通じて認められたいくつかの画期についてみてきたが、下総・上総・安房の三か国から構成された房総地域においては、下総と違って上総・安房は鎌倉幕府や鎌倉府といった上位の権力と直接的に結びついていた歴史的背景を有するため、各々の画期は考古学研究においてもより鮮明に認めることができるのではないだろうか。

(柴田龍司)

註

- 1 石井進・萩原三雄編『中世の城と考古学』新人物往来社 1991
前川要 「中世集落の動向と流通機構の再編」
斉藤慎一 「本拠の展開」
柴田龍司 「中世城館の画期」
- 2 高梨俊夫『下ノ坊遺跡B地点』(勸千葉県文化財センター 1990
大谷弘幸・笹生衛「関東地方の条里」『考古学ジャーナル』310 ニューサイエンス社 1988
- 3 千葉城郭研究会編『千葉城郭研究』1・2号
千葉城郭研究会 1989・1992
- 4 笹生衛 『千葉県中近世城跡研究調査報告書』第10集 千葉県教育委員会 1990
津田芳男 『長南城跡』(勸長生都市文化財センター 1991
井上哲朗 『松尾町山室城跡』(勸千葉県文化財センター 1992
- 5 中井均 「中世城館跡調査の成果と課題」
『考古学ジャーナル』353 ニューサイエンス社 1992
- 6 横山勝栄「新潟県北部の小型城郭について」
『研究紀要』東蒲原郡三川村立三川中学校 1988
井上哲朗「村の城について」『中世城郭研究』2 中世城郭研究会 1988
- 7 萩原三雄 「中世城館址研究の一視点について—特に経営主体者をめぐって」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』1 1989
- 8 柴田龍司 「下総本佐倉城跡について—「惣構」の検討」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』4 1991
- 9 いまのところ16世紀代の集落遺跡の調査例が皆無に近いため、集落構造に変化があったかどうかは不明であるが、城郭の機能に変化がある以上集落構造にも同様に変化があったものと思われる。



笹子城跡全景（北→）



調査区全景



平場 2 (手前)・3 現状



平場 2・3 完掘状況



平場 6・7 現状



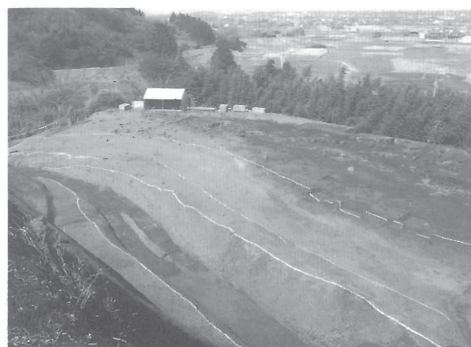
平場 6・7 完掘状況



平場 6・内枡形虎口 (堀 F・G)



平場 6 東半部完掘状況



平場 6 西半部完掘状況



平場 6・階段状虎口



平場7・堀D, E断面



平場7・堀D石塔類出土状況



平場6・堀H



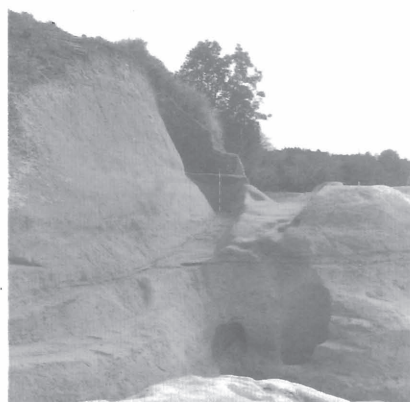
平場6・入口施設を有する竪穴遺構



平場8・Ⅳ～Ⅴ期全景



平場8・堀I, J, K断面



平場8・堀I断面



平場8・堀K



平場12・13現状



平場12・13西半部完掘状況



平場 6・8・12接合部完掘状況



平場 6・8・12接合部完掘状況



平場12東半部完掘状況



平場11・14完掘状況



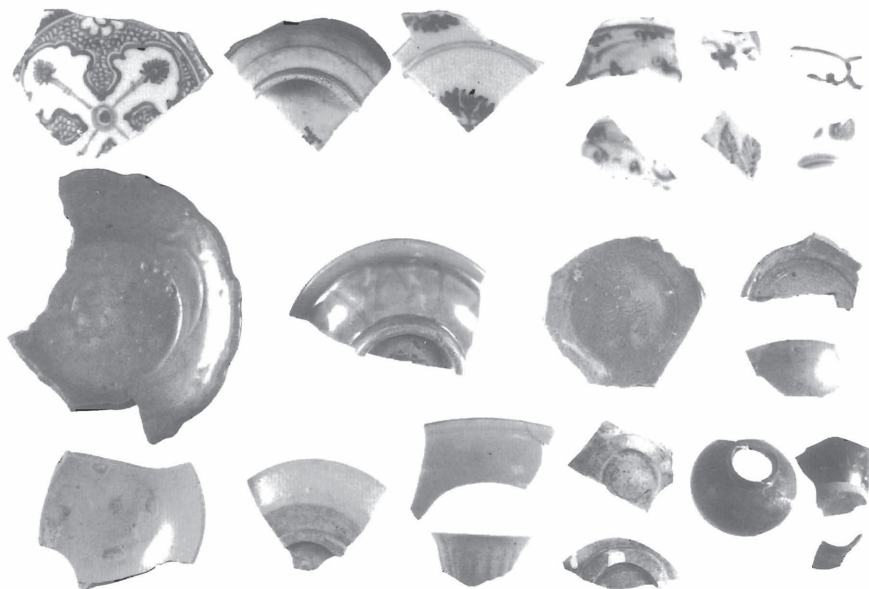
平場 6・鉄鍋出土状況



平場 8・水晶製ミニチュア五輪塔

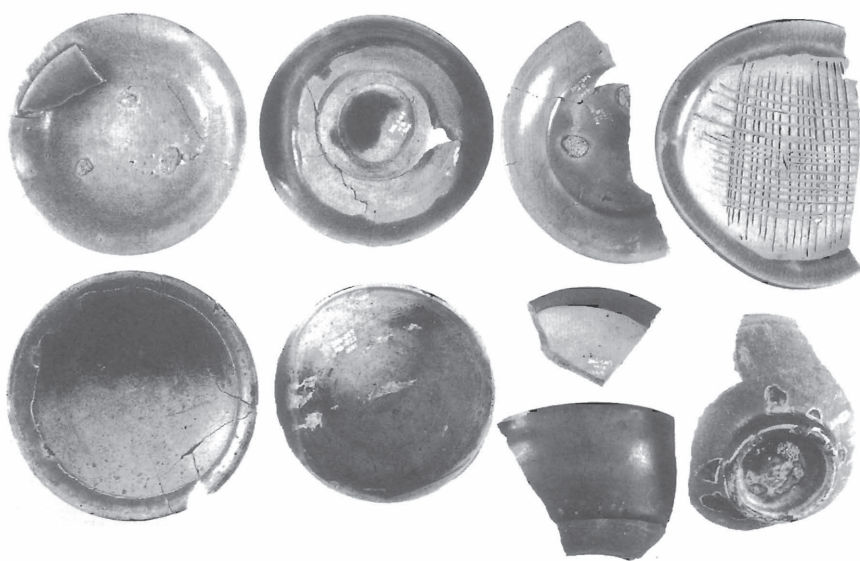


平場 6・独鈷杵



出土遺物・中国陶磁

染付皿(上段)、青磁皿(中段)、白磁皿・坏(下段)、茶入(下段右)



出土遺物・瀬戸美濃陶器

灰釉・鉄釉皿、卸皿、天目釉碗、灰釉碗